

真言宗安心要義

特233


837




始



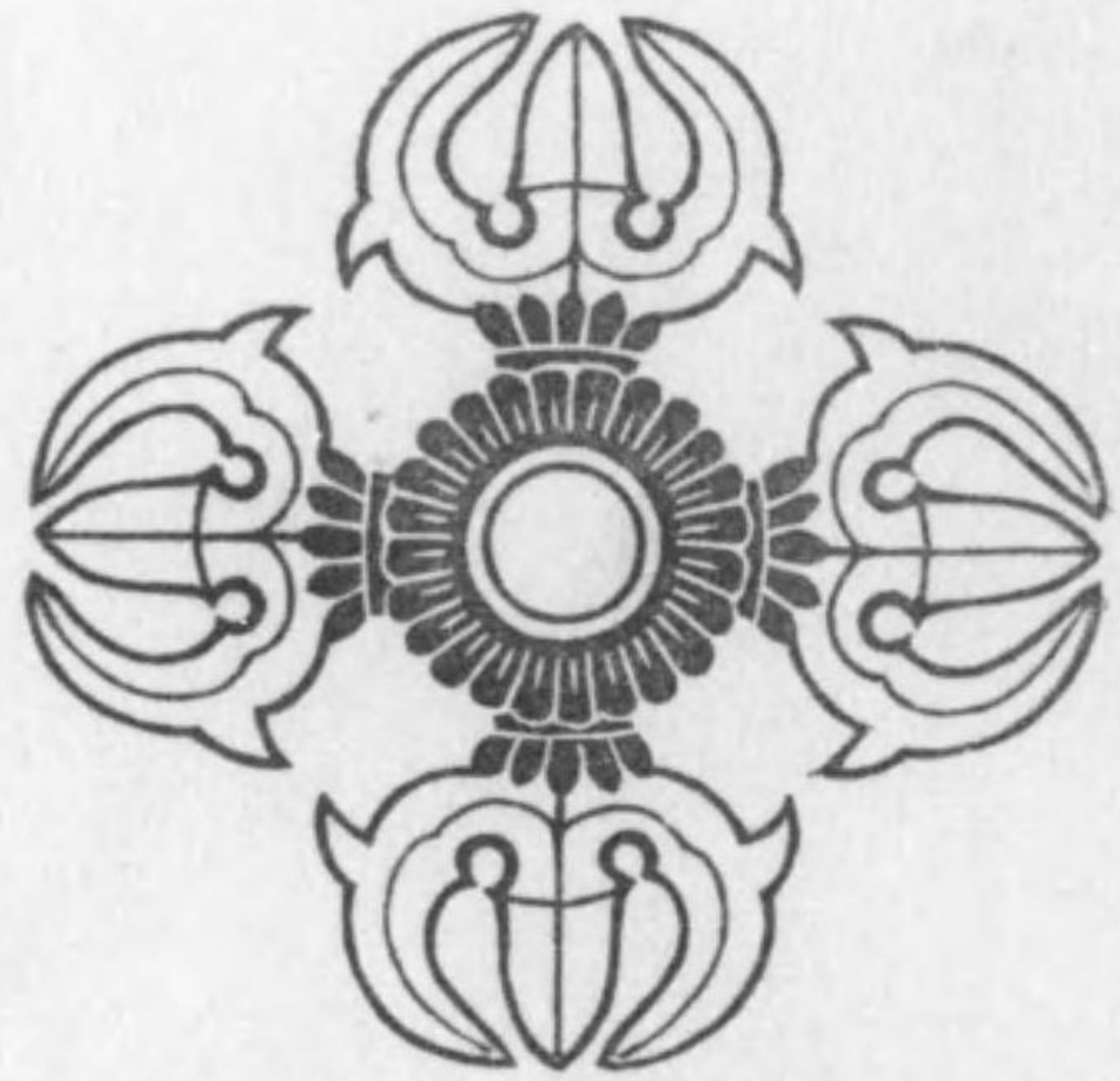
特233
831



 著秀實谷長正僧大



 義要心安宗言真



社報新大六



序

この一篇は昭和九年六月智山派宗務所主催にて同派本山京都智積院に於て開催せられたる全國布教師講演會の席上、長谷寶秀大僧正が講演されました時の筆記であります。智山派宗務所は之れを出版して全國の同派布教師に頒ち布教安心の指針とされました。本社また同派宗務所及び長谷大僧正の許諾を得て當時六大新報に數回に亘つて掲載しましたものを再びまとめて茲に出版することに致しました。近時各宗派とも自宗安心の統一が要望され

明徴なる宗意安心のまごに布教報國、宗風宣揚が行はれてゐます。大日經を所依とするわが密宗の安心は、この眞言宗安心要義に依つて明かに而も簡にして意を盡し得てゐるご信じます。現非常時局下に於ける斯書の上梓は極めて意義深く、廣く法益に預る事に致しました。

昭和十三年二月

六大新報社

眞言宗安心要義目次

安心といふ言葉……………一

安心統一の可否……………四

安心統一上の諸説……………六

イ、上中下三根安心各別説……………

ロ、正結二根安心各別説……………

ハ、總別二種安心説……………

ニ、在家出家安心各別説……………

ホ、因根究竟の三句を以て統一する説……………

三句一々に顯教に異なる事……………一六

根究竟の二句にかける所以……………一八

安心は三句の中別して因の句に就て説く事……………二〇

成佛の正因……………二三

菩提心……………二六

イ、安心と信心との同異……………ロ、安心と信心……………

ハ、信心……………ニ、信心とは何を信するか……………

ホ、深信と信解……………ヘ、信心と菩提心……………

修行……………三六

イ、和讃料簡……………ロ、信心相續と意密との區別……………

ハ、義を知らずして眞言を唱ふるも功德ある事……………ニ、信心と妄念……………

ホ、臨終正念……………ヘ、有相の三密と無相の三密……………

證果……………五〇

イ、即身成佛……………ロ、二生も三生も即身成佛なる事……………

ハ、速疾頓成と不轉肉身……………ニ、往生……………ホ、密嚴淨土……………ヘ、往生即成佛……………

本尊……………五七

三力……………六八

善惡の標準……………七〇

眞言宗安心要義

長谷寶秀

我が宗の安心は顯密二教の判釋が根本になります。隨て順序として先づ第一に顯密二教の判釋に就いて大體申上げねばならぬのでありますが、これは平生の教相談に於て沙汰すること、すでに十分御承知のこと、思ひますから、すべて省略して、直ちに布教上の安心についてお話し申し上げます。

安心といふ言葉

我宗には安心といふ言葉は昔はあまり用ひなかつたのであります。私の知る範圍に於ては、安心といふことは聖教の中に於てもあまり多く拜見致

二
しません。この言葉は察する所に依れば、浄土門諸宗が盛んに行はれまして以來、その影響を受けて我宗にもこれを用ふるやうになつたものと思はれます。浄土宗や真宗では盛んに安心といふことを申しますので、真言の信者も浄土門の説教などを聞いて、浄土宗には斯ういふ安心といふものがあるが、真言の方では安心は一體、何處にござりますか、といふやうな質問をする。真言には安心はないといふ譯には行きませんから、我宗でも安心といふ言葉が用ひられるやうになつたものと思ふのであります。その言葉が初めて我が宗の人々の著作の上に現はれましたのは徳川時代の中頃位でありまして、その以前には安心といふ言葉はないやうに思はれます。言葉がすでになかつたもので後に他の言葉を借りて用ふるやうになつたのであるから、安心といふ言葉の意味も確立して居らず、人々皆思ひくゝの安心を説いて居りましたので、その異説を數へますと随分澤山あります。先

三
づ菩提心安心といふものがあります。菩提心に安住するのが真言宗の安心であると申すのであります。或は凡聖不二安心といふものがあります。古義派では現今おもにこれを用いて居るのであります。又即身成佛安心といふことがあります。我が宗に於ては弘法大師は即身義を作つて即身成佛の義をお立てになつて居る。これが一番の安心であると申すのであります。又三密修行安心といふものがあります。真言宗では三密行を修して佛果を得るのであるから三密修行が安心であると申すのであります。又密嚴浄土安心といふものがあります。大日如來の浄土は密嚴浄土であるから、これを目的として進むのが真言の安心でなければならぬといふのであります。十方浄土安心といふものがあります。浄土宗や、真宗では西方極樂浄土の一を願ふことになつて居るけれども、我が宗は西方に限らず、十方の浄土をそれくゝの機に従つて願つてよいのである。これが真言宗の安心である

といふのであります。十方ではあまり廣過ぎるから西方浄土だけを願ふといふこともあります。兜率浄土安心といふものもあります。弘法大師は兜率天に往生して、彌勒慈尊の御許に侍ると御遺告に仰せられてあつて、大師すでに兜率天に往生して居られるのであるから、眞言宗の信者の往生を願ふ者は兜率天往生を願ふのが宜しいといふことを唱へる人もあります。

安心統一の可否

斯ういふ風に思ひ／＼に説いて居るので、何とか一ツに纏めなければならぬといふ考へは誰人にも起ることでもあります。即ち安心の統一といふことでもあります。所が安心の説が區々になつて居るものを統一すべきであるか、すべからざるものであるかといふことは、又一つの議論でありまして、これは數年前吾々の同僚の間に於ても論じたことではありますが、統一するのは悪いといふ説もあります。浄土門諸宗では阿彌陀如來一佛を擇ん

で本尊とするから、阿彌陀さまの誓願にお縋り申すといふ一ツで安心を定めるのは、尤もであるが、我が宗は一佛に限らるのである。各寺院の本尊を見ても、觀音様もあれば不動明王もあり、寺院に依つて本尊が皆別々になつて居る。本尊がすでに各別であるから、安心も亦、各人の思ひ／＼に任せてよいのである。我宗には兩部曼荼羅があつて、曼荼羅の中には幾千の佛菩薩がある。斯様な曼荼羅を立て、居るといふことから見ても、安心は人々各別でよいのである。統一するのはよくないといふ風に論ずる者があります。けれども、この説は甚だよくないと私は思ひます。本尊が千差萬別であつても安心が一つになることは妨げないと考へます。龍猛菩薩の菩提心論に「諸菩薩の身を成ぜんと願ふ者を亦菩提心と名く、何となれば次でたる諸尊皆大毘盧遮那佛身に同なり」とあります。之に准じて考へて見れば、諸佛菩薩に共通する所の安心があつて然るべきものと存じます。

本尊一定と安心一定とは、自から議論が別であります。これを混同して論ずるは甚だよくないと存じます。

安心統一上の諸説

サテ安心を統一せんとする上に於きましても、又いろいろの説があります。一説では上中下の三根の安心を立て、これをもつていろいろの説を統一しようとするのであります。この説は槇尾の自性上人並に天盧懷圓師の説がその本であります。この説に依ると、上根は即身成佛、中根は往生淨土、下根は彌勒菩薩の出世の時に授記を受けて成佛するといふのであります。斯ういふ風に三根に分けていろいろの説を統一しようといふ説であります。これは一寸よいやうにも見えますが、教相上甚だよくないと申すことでもあります。この上中下三根の建立はもと大妙金剛經の説であります。その經文を見ますと、三根共に一生成佛の正機となつて居ります。經文の

イ、上中下
三根安心
各別説

三根の中には隔生成佛の結縁機は入つて居らるのであります。それで三根に分けてその中に結縁機を入れる説は一向に經説の證據がないのであります。依てこの説はよくないといふ事になつて居ります。明治十三年に東京で布教會議がありました。その時は今日のやうに各派分立の時でありませんから、新義の方も古義の方も一所に集つて會議を開いて協議したのであります。この時に弘法大師和讃の文句が問題になりました。それまでの弘法大師の和讃には

「真言宗旨の安心に

上中下根の別ありて」

となつて居りました。これは經説にも背くから改めなければならぬといふので、

「真言宗旨の安心は

上根下根の隔てなく

と改正せられ、それが、今日まで一般に行はれて居るのであります。

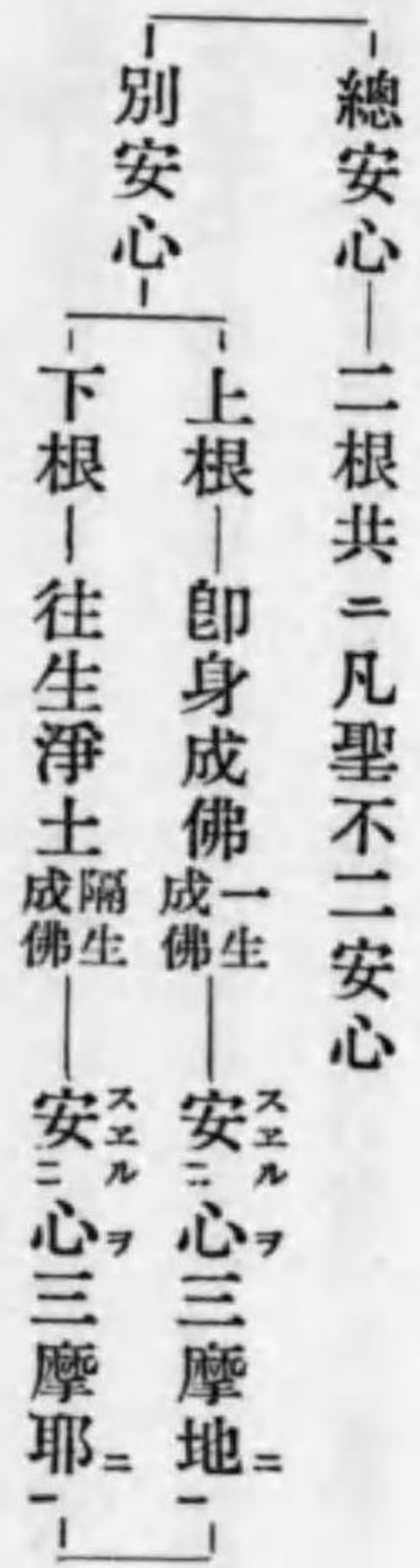
次に正機結縁の二機安心各別としていろ／＼の安心を統一しようといふ説であります。この説もやはり天盧懷圓師から出たもので、服部鏝海僧正の安心論もこの説に依て居ります。上根下根と分けまして、上根は心を三摩地に安^すて、自身即佛と觀じ、下根は心を三摩耶に安^すて佛の御本誓に縫つて往生するといふのであります。上根は姑く措いて、下根の方は、密經の中に、大日如來が、我が所説の三密を修行するものがあれば、我れ必ずその所に至つて救うてやるぞといふ御本誓があるから、その御本誓にお縋り申上げて往生を願ふといふのであります。さういふ風にして安心を下根と上根の二つに分けたら宜からうといふのであつて、この説はなる程よく出來て居る様に見えますが、これ亦證據のないことで、私案の説に過ぎ

ロ、正結二
根安心各
別説

ないのであります。自身即佛といひ、自身成佛といふことは眞言宗の大宗でありまして、眞言宗全體が自身成佛の觀より外はないのであるから、下根結縁といふは、自身即佛、自身成佛の法門に結縁する者をいふのであります。今現在の所では自身成佛の理を觀することが出來ないでも、この祕密の法門を信じて行きさへすれば、いつか知らんが、自身即佛の觀が調ふ様になつて、自身成佛が出來るのであります。かく信じて進んで行くのが下根結縁の機根であります。故に下根の者であるからというて自身成佛の觀全くなしといふことはありません。又如來の本誓に縫るといふことも下根には限りません。上根の人でもやはり如來の御本誓にお縋り申すのであります。上根の行者は三密行を修行致しますが、何故修行するかといふと三密行は如來本誓の行體で如來の本誓空しからざる事を深く信ずるから、これを修するのであります。故に上根の者といへども、如來の本誓にお縋

り申すといふことはないことではないのであります。斯ういふ譯であるからこの論も一寸見れば宜しいやうであります。實は徹底したものでないのであります。

又服部僧正は總安心、別安心といふことを言はれました。略圖に作れば左の通りであります。



總安心は上下二根共に凡聖不二安心で、別安心には二根を分つて、上根は卽身成佛安心、下根は往生淨土安心とするのであります。これは服部僧正の安心教示章講義録などに見えて居りますが、これも一寸見れば誠に巧みで宜しい様であるが、元來總安心、別安心といふことは服部僧正の新案

ハ、總別二種安心説

でありまして、經論の中にその證據がないのであります。依て古義の方でもいろく議論がありまして、後年に至りては服部僧正御自身も總安心別安心といふことは一旦唱へ出したけれども、少し都合が悪いので、取消さねばならぬ様に思ふと仰有つて居りました。私も親しくさういふ御話を承つて居ります。總安心の外に別安心といふものを立てることが抑々間違つて居るのであります。何故かといふと、凡そ安心といふものは宗意に安住するのが安心であります。宗意といふものは一ツでなければならぬ。何宗でも一宗の内に宗意が二ツも三ツも有るといふ事は、道理上有るべからざる事であります。宗意が既に一ツならば、安心も亦随つて一ツでなければならぬのであります。一宗の中で上根と下根と二人の安心が各別であるといふことはない筈であります。上根下根の安心の區別は種類が變るのではありません、たゞ淺深厚薄の不同があるだけであります。喩へば子供が書

いた大の字でも、大人の書いた大の字でも、巧拙の不同は有つても、大の字は同じであります。子供と大人とに依つて大の字が違ふといふことはありません。又薄墨で書いた大の字と、濃く磨つた墨で書いた大の字と、墨の濃淡の不同は有つても大の字は同じであります。上下二根の安心もこれと同じく、上根も眞言の宗意に安住し、下根も眞言の宗意に安住するので安心は同じである筈であります。但し上根は深く解して深く安住し、下根は浅く解して浅く安住するのでありますから浅深厚薄の差別があります。設ひ浅深の別は有つても安心は同一であるべき筈であります。眞言行者は上根下根共に眞言の宗意たる凡聖不二の理を信じて之に安住するのであるから、安心は上下二根共に同一であるが、上下二根の不同は凡聖不二の宗意を深く解すると浅く解するとの差別に過ぎないのであります。而るに上下二根の安心は浅深の不同といふ事に氣附かずして、全く種類各別のもの

ニ、在家出家
家安心各
別説

の様を思つて、總安心の外に別安心を立てたといふ事は全く誤りと考へられます。

もう一つは在家出家の安心各別といふ説であります。此は天盧懷圓師の安心小鏡、服部僧正の安心教示章などに見えて居ります。出家の者は上根上智であつて即身成佛する。在家の者は下根下智であるから即身成佛は出来ない、隔生往生である、といふのであります。これも甚だよくない説であります。出家在家の安心各別といふことは經論には更に證據の無い事でありませぬ。只今申しました様に、眞言宗の安心は出家であらうが、在家であらうが、その宗意に安住するのが安心でありますから、安心は一ツでなければならん筈であります。出家在家の別に依つて安心が變るといふこととはない筈であります。出家は上根、在家は下根といふことも經論には證據のないことでありまして、上根下根は出家在家に通ずるもので、出家に

も下根があれば、在家にも上根があるのであります。吾々は幸ひに出家致しまして兩部灌頂も受けて居りますけれども果して上根上智で即身成佛が出来るかどうか、これは分りません。皆様も御同様と思ふのであります。在家の人であるからというても、必ずしも下根とは限りません、一たび三密の法門を聞いて即座に悟りを開くやうな上根上智の人がその中にないとは限りません。吾々は凡夫僧でありまして神通力を得て居らんから、他人の機根を見分けることが出来ない。この人は上根であるか下根であるかといふことの見通しは更につきません。雲照和尚の安心義章にも「出家と雖、下根下智の者なしとせず、在家と雖、上根上智の人なしとせず」と明かに記してあります。かくの如く上下二根は出家在家に通ずるものでありますから、在家出家の安心が各別であるといふことは有るべからざる事であります。

ホ、因根究
竟の三句
を以て統
一する説

更に又因根究竟の三句を以て安心を統一するといふ説があります。三句は御承知の通り大日經の説で、菩提心爲因、大悲爲根、方便爲究竟の三句であります。即ち菩提心と大悲萬行と方便究竟の果徳とであります。これを以ていろ／＼の安心を統一しようといふのであります。これは高野山釋良基教正の密宗安心鈔の説でこれが一番良い説と思ひます。私共學生に話をする時には、何時でもこの説に依つて話をいたして居るのであります。これで統一致しますと、前に申しましたいろ／＼の説が皆この中に入つて來ます。菩提心安心、阿字本不生安心、凡聖不二安心、即身成佛安心（理具）これ等は皆因の句の中に入ります。三密修行安心、これは根の句に屬するのであります。その他、即身成佛安心（顯得）、三品悉地安心、密嚴淨土安心、十方淨土安心、極樂往生安心、兜率往生安心、人天往來彌勒出世授記作佛安心等、これ等のいろいろのものは皆究竟の句の中に入る譯であ

ります。此の如くいろいろの安心は皆この中に入つてしまひます。何故かといふと、因根究竟の三句は一行者の上の修行入證の始中終であります。先づ菩提心を起して、次に修行する、修行の力に依つて佛果を得る。斯ういふのが因根究竟の三句でありますから、皆この中に入つて來る譯であります。故に此の三句で統一する説が一番宜しいと思ひます。

三句一々に顯教に異なる事

菩提心も修行も佛果も顯密共に有る事ではありますが、今の三句は三句一々に皆顯教と變ります。菩提心を起すといふは佛果を期する心を起すのでありますが、顯教の佛果は有上の佛果で、眞言の佛果は無上の佛果であります。顯教は惣じて眞如無相の理を悟るを佛果とするから之を有上方便の佛果とし、眞言の佛果は十界輪圓の眞の果徳を開顯するのであるから有上方便の佛果ではなく無上眞實の佛果であります。この無上眞實の佛果を期

するを眞言の菩提心と申します。次に根の句について言へば顯教は六度の行を修し、眞言は三密の行法を修します。次に究竟の句について言へば、顯教の佛果は無相法身で眞如無相の理であるが、眞言の佛果は三密具足の果徳で、これを三密醍醐の妙果と申します。これが究竟の佛果であります。故に三共に顯教と變つて居ります。又眞言行者の三句を解り易くいへば、因の句の菩提心といふのは凡聖不二の理を信する事であります。根の句の大悲萬行といふは凡聖不二の行を修する事であります。究竟の句の佛果といふは凡聖不二の理に住する事であります。それで安心は凡聖不二の一ツで説きますと都合よく行くのであります。凡聖不二の理を信じ、凡聖不二の行を修して、凡聖不二の理に契ふ、これを以て眞言の安心と致します。故に我が宗の安心をかいつまんで定義の様にいうて見れば、

『我が宗の行者は男女道俗を論ぜず、上根下根を分たず、皆能く分に應

じて凡聖不二の理を信じ、凡聖不二の行を修し、凡聖不二の果を期するを以て安心とす』

斯ういふ風に申せば先づ宜しからうと思ひます。凡聖不二の一を以て因根究竟の三句を貫いて意得るのであります。

根究竟の二句にかける所以

安心であるから因の句の菩提心だけで意得てもよい様なものでありますが、實には根の句、究竟の句にもかけて言はないと都合が悪いのであります。何故かといふと、例へば病氣には醫者の治療を必要とするのであります。爰に病人が有つて、醫者にかゝる事も知らず、唯だ病氣に苦しんでゐる人があるとしみます。友人が来て、君は病氣ならば醫者に見て貰ふに限る醫者に見て貰へばキット治療して呉れる、徒らに苦んで居るのは愚な事ぢやと言つて勧めます。それなら見て貰はふかと言ふので醫者を迎へます。

醫者が来て病氣を診察して、この病氣はこれ／＼の病氣ぢやからこの薬を飲んで、斯ういふ風に養生するが宜しい、左様すればこの病氣はなほるに相違ないと言ひます。斯ういふ風に病氣の性質と治療の方法と治療の結果とを明かに確かに説明して聞かせますと、病人は醫者を信じて彌々その薬を飲んで病氣全快するのであります。所が病人が醫者に向つて尋ねます。

「此の病氣はなほりませうか」醫者「分りません」病人「薬はありませんか」醫者「マゝこの薬を飲めばよいでしょう、なほるか、なほらんか其邊は分りません」といふ様な事では安心が出来ません。この病氣はなほるに違ひないと言ひ、この薬は必ず効能があると言ひ、服薬の結果は必ず完全に病氣全快すると言へば、病人は安心して醫者を信じて治療して貰ふ事になるのであります。これはなほるに相違ないと信ずるのが因の句であります。この薬を飲めばなほるに違ひないと信じて薬を飲むのが三密行の根の

句であります。完全になほる所が究竟の句であります。

眞言の安心もこれと同じく凡聖不二の理を聞いても、凡夫の吾々の様なものが、なぜ佛に同じといふのであらうか、吾々の様なものが、なぜ佛になれるであらうかと思ひ、いろ／＼疑ひがありますから、凡聖不二と聞いたゞけで、それで安心が出来るものではありません。どうすれば佛になれるかといふに、三密の行を修すればよろしい。この行を修すれば必らず佛果を得るに相違ないから、必ず之を信じなさいといへば、こゝで始めて安心が出来るのであります。故に凡聖不二の理を信じ、凡聖不二の行を修して凡聖不二の果を期するといふのが、眞言行者の安心といふことになつて來るのであります。

安心は三句の中別して因の句に就て説く事

安心は斯の如く惣じて三句に通じていふのでありますが、別していへば

因の句に歸着するのであります。因の句に屬する安心説が、菩提心安心、阿字本不生安心、凡聖不二安心、即身成佛安心(理具)の四説ありますが、この中で菩提心を主にすれば善いと存じます。それで斯ういふ風に言葉を立てます。

『眞言行者の菩提心といふは、法身如來の直説たる凡聖不二の理を信じて、無上菩提を成ぜんと願ふ心なり』

斯ういふ風に菩提心を説けばよいかと思ふのであります。それで古義の方で大師和讃に

眞言宗旨の安心は

上根下根の隔てなく

凡聖不二と定まれど

下根に示す易行には

偏に光明眞言を

行住坐臥に唱ふれば

宿障いつしか消えはてゝ

往生淨土と定めり

この中「凡聖不二と定まれど」といふのが凡聖不二の安心であります。此頃古義派一般に凡聖不二といふ言葉を用いて、説いて居るのであります。「下根に示す易行には」といふより下は、安心でなく、行を説いたのであります。行は三密行であるけれども、今和讃は下根に示すつもりになつて居りますから、一密口稱の行だけを文句に表はした譯であります。これも安心を因の句に定める意であります。「凡聖不二と定まれど」というて安心を因の句に定めて、「下根に示す易行には」というて、行を説いて來たのであります。

成佛の正因

次に成佛の正因といふことを申し上げます。成佛には何が因となるかといふことであります。念佛門の方では念佛正因、信心正因といふ事があります。淨土宗ならば念佛正因で、南無阿彌陀佛と念佛を唱へる。その功德に

依つて淨土に往生するといふので即ち念佛が往生の正因となるといふのであります。眞宗の方では信心正因で、阿彌陀如來の他力の本願を信する、信する一念さへ起つたならば、その時に淨土往生の業が決定する、それから後に南無阿彌陀佛と念佛を唱へるのは佛恩報謝の念佛である、といふのであります。これは念佛の力で往生するのではない、信心の力で往生するのであるから信心正因である、といふ風に立てるのであります。我が宗に於て成佛の正因は何ぞといふことにつきまして、書物の上では餘り見當りませんが、私は先輩の御説をいろ／＼と承つた事があります。宿殖正因、値遇正因、菩提心正因、信心正因、口唱正因、三密正因といろ／＼ありますが、宿殖正因といふのは、宿殖善根の勝れたものでなければ眞言密教に結縁することは出来ない。過去世の宿善の功德に依つて今生に成佛することが出来るのであるから、宿殖善根が成佛の正因である、といふのであり

ます。宿善有無といふ論議がありましたして、必らず宿善に依るといふのが定まつた義であります。値遇正因といふのは凡そ宿殖深厚の者に非ざれば眞言密教に遇ふことが出来ない。幸に遇うたらば必ず成佛が出来る。青龍和尚の御言葉にも「冒地の得がたきには非ず、この法に遇ふことの易からざるなり」とあつて、この眞言祕密の法に遇ふことが六ヶしい、遇へばやすくと成佛することを得る、といふ意である。依て値遇が成佛の正因であるといふ説であります。併し已上の兩説は過去の遠因を論するのであつて宿善有無の論と同様であります。今からどうするといふ事でないから、當來の成佛に對する現在の正因を論する事にはならぬのであります。次に菩提心正因といふ説、これが尤も宜しいのであります。大日經に「菩提心を因とす」といひ、大日經疏には「菩提心と者即ち是れ如來の正因なり」といひ、金剛頂略出經にも「菩提心と者大悲より起る、成佛の正因智慧の根

本たり」と説いてありますから、正因を論するには菩提心正因といふことに定めるのが、經論の證據もありまして一番よいかと思ひます。信心正因といふ説もありますが、大日經疏に「菩提心と者白淨信心是れなり」とありますから、信心を直に菩提心と意得る事が出来ます。さうすれば信心正因と菩提心正因とは同じ事になります。因みに申しますが信心と菩提心とは通常の説では各別と致しますけれども、我が宗には信心と菩提心と同か異かといふ論議もありまして、東寺の賴實法印などは大疏の御釋等に依て同とするのであります。委しくは本母集を御覽下さい。口唱正因といふ説も頻りに主張する人がありまして、三和讃制定の時に、安心和讃の中に「口唱の功力を因として」といふ句を入れたといふ事を承つて居りますが、これも強て間違ではないけれども、口唱を正因とする經論の證據は無いのであります。又三密正因といふ説、これも義に於ては正しいのであります。

即身義に引てある經文にも「三密の金剛を増上縁として、能く毘盧舍那三身の果位を證す」とあつて、三密行は成佛に對する増上縁となつて居ります。菩提心が因であるから三密行は縁になるのであります。前の口唱正因の口唱は三密の中の語密であるから、縁といふべきであつて、正因といふのはよくないと思ひます。これで大體因根究竟の三句を以て宗旨の安心を統一する義を申し上げ終りましたから、これから後は三句一々について意得べき事を少々申し上げます。

菩提心

安心といひ、信心といひ、言葉は變つても義は一つであります。安心といふ言葉は前にも申し上げました通り、古い書物にはなく、後に徳川時代の中頃に至つて、我が宗にも盛んに用ふる様になつたものであります。學如和尚の對賓法語に安心は住心といふに同じといひ、天盧懷圓師の禪要餘稿

イ、安心と
信心との
同異

之餘といふ書には、安心は心を菩提心に安住する義と釋せられてあります。安心の心は行者の心で、菩提心といふは、阿字本不生の理、凡聖不二の理であります。行者の心を阿字本不生の理、凡聖不二の理にするのを安心といふとの意であります。この釋は最もよろしいと存じます。要略念誦經に心常安_ニ住_セ菩提所_ニとあり、念誦結護に是故智者安_ニ心此門_ニ祕密爲_レ行とあり。大日經疏第二に當_ニ一向安_ニ心諦理_ニ務使_テ穿徹_トとあります。この中に菩提所といひ、此門といひ、諦理といふのは、何れも皆阿字本不生の理、凡聖不二の理を指すのであります。故に安心とは心を菩提心に安住する義なりといふ天盧懷圓師の釋はよく經說に契うて居ります。依て安心といふ言葉の釋はこれによるが一番よろしいと存じて居ります。安心の二字はア_ンジンと濁る時は心をおくと訓みます。心を安住する義で、吾々行者が自分の心を菩提心に据ゑる事であります。若しア_ンジンと二字共に清んで讀

む時は、吾々の心の安らかなる義となりますが、心を据ゑたらば心自から安らかになりますから、心安らかなる義も、自から含まれて居ります。故に天盧懷圓師の釋に「アンジンといふは始に就き、アンシンといふは終に就く」と申して居ります。學如和尚の釋に「安心とは住心といふに同じ」というてありますが、誠によい處に氣のついた釋と思ひます。安心といふ言葉は我が宗には昔は多く用ひなかつたものでありますが、その意味は勿論あつたので、弘法大師の十住心論の中の第十祕密莊嚴住心といふ住心の二字が即ちそれであり、學如和尚はそこへ氣附かれたのであります。その意味は天盧懷圓師の釋と同じであります。

安心と信心は同じこととあります。心を据ゑるといふのが、即ち信心のこととあります。疑は不安の相であるから、疑を離れた所は即ち安心の相であります。信心も之に同じく、疑は不信の相であるから、疑を離れた所

ロ、安心と
信心

ハ、信心

は即ち信心の相であります。故に信心と安心とは言葉は變つても、その義は同じであります。

信心といふは如何なる心かと申しますと、疑を離れて心淨きを性とすと釋してあります。俱舍唯識共に同じ意になつて居ります。水の中へ雜物を入れると水が濁る如く、心に疑があれば心が濁ります。雜物が無くなれば水が澄む如く、疑が無くなれば、心が澄んで淨らかになります。涅槃經に池珠影現の譬があります。人ありて大なる池に船を浮べて遊覽する時、過つて瑠璃の珠を水中に落しました。家來の人々が競つて水に飛込んで探しましたので、水が濁つて珠がわからぬ様になりました。人々が皆失望して水を出て船に乗り、尙ほ水中をのぞいて居りますと、水中にある珠の力に依つて水が美しく澄んで珠の所在が見えました。その時一人の智惠者があつて唯だ獨りそろ／＼と水中に入つて珠を拾ひ得たと申します。珠は信心の譬

であります。珠が水中に在れば水の濁りが澄む如く、信心が心中に入れば心中の疑が無くなつて心が清浄になるのであります。

昔唐の則天武后の時に、印度から清泥珠といふ珠を献上致しました。則天武后はこの珠の貴重なることを知らずして、長安の西明寺へ寄附せられました。後に印度の商人が来て黄金十萬兩で買取りました。人々が怪んで、なぜ其様に大金で買ふのかと尋ねましたら、商人の答に、此の珠を泥中に投ずれば泥悉く清水となつて諸の珍寶を求め得る事が出来る。故に何程の大金を拂つてもかまはぬと申しました。五雜俎といふ書に此の話が出て居りますが、斯ういふ不思議な珠もあるものと見えます。

さて信心とは何を信するかといへば、佛を信じ法を信するのであります。佛は大悲大智の御方なりと信じ、法は清浄眞實なりと信じます。慈悲心の欠けたものは妄語を吐いて他を欺くことがある。佛は大悲圓滿の方である

ニ、信心とは何を信するか

から、妄語し給はず、吾々を欺くことがない。又智慧の足らぬもの、言ふことは往々に誤りがある。佛は大智圓滿の御方であるから、その説くところ少しも誤りがない。故に佛は大悲の故に欺かず、大智の故に誤りなしと信するのであります。又法は佛説なるが故に清浄眞實なりと信じます。佛説の法は妄語のけがれを離へざるが故に清浄である。佛説の法は誤りなきが故に眞實である。故に法は佛説なるが故に妄語を離れて清浄なり。誤謬を離れて眞實なりと信するのであります。此の如く佛を信じ法を信じて一切の疑を離れて心の澄みわたりたるを佛法の信心と申します。

大日經の具緣品に阿闍梨の十三徳を明す中に、第一に應_レ發_ニ菩提心_一とあり、第八に信_ニ諸佛菩薩_一とありますが、大疏に之を釋する時、第八を廻らして最初に置くべしと言つてあります。これに依て信心は本で、菩提心も信心から起るものなることを知るべきであります。

信心に就いて大疏には捨擲駄シヤラダの信、阿毘目底アビボキチの信といふ事を説いてあります。捨擲駄シヤラダの信を深信といひ、阿毘目底アビボキチの信を信解といひ、深信信解の二種であります。深信は佛法の法義を聞いて自分にはわからずとも、この法は佛説であるから間違ひはあるまいと思つて深く信するのであります。譬へば井戸を掘らうと思ひ、どこを掘ればよいかと人に尋ねる時、老人があつて此處を掘れと示して呉れます。其の示された處は高地で、岩石で、トテモ水が出さうには思はれないけれども、この老人は萬事經驗に富み、且つ正直で親切で、未だ曾て人をだました事の無い人であるから、その言ふ事に少しも間違ひはあるまいと信じて、其の示された處を掘る様なものであります。大疏に

「深信と者、此の信、梵音には捨擲駄シヤラダといふ、是れ事に依り人に依る信なり。譬へば長者の言を聞くに、或は常情の表ほかに出たり、但しこの人い

まだ嘗て欺誑せざる故に即ち諦受して依行するが如し、亦これを名けて信とす」

とあり。又同疏に

「先世に已に曾て善知識に親近するが故に、三寶に縁深くして比量籌度すべからざる處なりと雖も、即ち能く懸かに信するが故に深信といふ」とあります。

次に信解といふは一分道理がわかつて疑を離れて、愈々勵んで修行するのであります。譬へば井戸を掘る時、最初は乾いた土や石ころばかりであるが、怠らず掘る内に、柔い泥が見える様になりますと、これならば、もう少し掘れば水が出るに相違ないと思つて、愈よ勵んで掘る様なものであります。大疏に

「有大信解と者、此の信解、梵音には阿毘目底アビボキチといふ、明かにこの理を

見て心に疑慮なきをいふ、井をほるに、已に漸く泥に至れば、未だ水を見ずと雖も、水必ず近きに在りと知るが如し、故に信解と名くとあります。

この深信と信解とは一人の上にあるもので、初は深信で、後に信解となるのであります。吾々凡夫が最初に凡聖不二凡身即佛の理を聞き、三密修行の功德を聞いた時には、更にその道理がわかりません。わからんけれども、佛説なるが故に、深く信じて修行する。段々修行する内に、病氣がなほる、災難を免れるといふが如き、世間の御利益を得る様になる。斯ういふ不思議の御利益を得る程だから、即身成佛の御利益もキツト得られるに相違ないと信するに至るのであります。故に深信信解は一人の上にあつて深信は初にあり、信解は後にあります。信心にこの二種あるに依て行者の信心に淺深厚薄あることを知るべきであります。

へ、信心と
菩提心

菩提心といふは佛果菩提を期する心で、即ち誓願心であります。天台の十疑論には願作佛心と釋し、龍猛菩薩の菩提心論には誓心決定と釋し、善無畏三藏の大疏には決定誓願とも、一向志求一切智々、必當普度法界衆生とも釋し、皆同じ意であります。

又菩提心論には勝義行願三摩地の三種の菩提心を説き、弘法大師の三昧耶戒の序には、この三種の上に信心を加へて四種の菩提心としてありますが、信心は物體で、勝義行願三摩地の三種は別用であるから、菩提心論は別用の邊に就て三種を明し、戒序はこれに物體たる信心を加へて四種となされたのであります。

先づ信心が起つて、その上に上求菩提の誓願心の起つたのを菩提心と名けます。故に眞言行者の菩提心は左の通り説けば宜しからうと存じます。即ち

『法身如來の直説たる凡聖不二の理を信じて偏に無上菩提を成ぜんと願ふ心なり』

かう言へば眞言行者の菩提心の大體を盡して居り、且つ誤りもあるまいと存じます。法身如來といふのは能説の教主であり、凡聖不二の理といふのは所説の法であつて、これを信するのであります。「法身如來の直説たる凡聖不二の理を信じて」といふまでが信心であります。「偏に無上菩提を願ふ心」といふのが誓願心であります。信と願とであります。信するが故に誓願する。信ぜざれば誓願は起りません。依つて信心は體、誓願は用といふことになります。

さて凡聖不二の理を信するといふ中に於て、自ら三重の義を含むのであります。

一には自身本具の性徳を信ず

二には迷悟の因果を信ず

三には三密の妙行を信ず

この三重であります。初に自身本具の性徳を信するといふは、凡聖不二の理を聞いて、吾々凡夫も大日如來と同じく六大四曼三密の徳を具して本來佛と同體なることを信するのであります。次に迷悟の因果を信するといふ中には、迷の因果と悟の因果との二つありまして、迷の因果といふは、吾々は本來佛と同體なれども、無始已來無明の惑に依て迷うて凡夫となり生死にさまようて居ると信するのであります。悟の因果といふは、吾々は凡夫なれども佛の教に隨順して如説に修行すれば佛になれると信するのであります。即ち下轉の因果と上轉の因果とであります。次に三密の妙行を信するといふは、成佛の道は種々あれども三密の妙行に及ぶものなし。他の法に依て成佛するは方便の佛果を得るに過ぎず、眞實の佛果を得ること

が出来ず、三密の妙行に依れば無上眞實の佛果が得られる、無上眞實の佛果を得るは三密の妙行の外には更に無しと信するのであります。

已上三重の義は「凡聖不二の理を信ず」といふ句の中に自から含んで居ります。この三重の義は眞言教主大日如來の直説なるが故に之を信するのであるから「法身如來の直説たる凡聖不二の理を信じて」と致したのであります。

「凡聖不二の理を信ずる」といふ中に於て三重の義を開いて釋する事は小納の私案でありますが、其の意味は全く大師の戒序の御釋に依つたものであります。戒序を御覽下されば三重の義がハッキリと文に顯はれて居ります。

修行

これまでは三句の中多分因の句に就て申し述べましたが、これからは第

イ、和讃料簡

二の根の句即ち修行に就て二三の要義を申上ます。

大師和讃の中に前に申上げました通り「眞言宗旨の安心は云々」とありまして、その次に

偏に光明眞言を

行住座臥に唱ふれば

宿障何時しか消はてゝ

往生淨土と定まれり

とあります。眞言を唱へたら、その功德に依て無明の闇が晴れて淨土往生が出来るといふ意味であります。これは行を説いたものである。行の中でも光明眞言を唱へることを勧めたもので、一密行であります。それから安心和讃の中に

一密怠ることなくば

増上縁の力にて

三密具足の時いたり

即身成佛せらるなり

といふ句があります。一密行で成佛が出来るかといふと、成佛は出来ない

三密具足して即身成佛が出来るといふのが宗義の定まりであります。大疏第十一卷に初觀之時隨見ハテハ一字ニ三事自然現也ニとあります。一字を見るといふは一密の行であります。三事自然に現すといふは自然に三密具足の時が來るといふのであります。又興教大師の五輪九字祕釋の中に、正成佛時具ハ三密ヲと仰せられてあります。行者の機根非一で、一密を修するものもある、或は二密を修する者もある。けれども正しく成佛するといふ時には必ず三密を具足して成佛する。成佛は必ず三密具足に依るといふ御意で、大疏の御釋と一致であります。この興教大師の御釋は誠に分明で古來の學者皆之を用いて居ります。

次に信心相續と意密は各別といふことを申し上げます。ある人はありがたといふ信心を起して、佛前に合掌して眞言を唱へる時は、信心は意密、合掌は印、眞言は語密、これで三密具足であるから、一密二密の行者とい

ロ、信心相
續と意密
との區別

ふものは全く無い様に思ふといふ質問を致されました。一寸考へると、さういふ風にも見えるが、併しさうでない。ありがたと思ふのは、これは信心相續であります。最初に起した信心が相續して居るのである。その上に阿字本不生の理を觀する、生佛一如の理を觀する、眞言の字相字義を觀する、本尊の相好、淨土の莊嚴を觀する、その他いろいろのことを觀するこれが三密の中の意密觀念で、信心とは各別のものであります。道場觀をしたり、字輪觀をしたり、入我々入觀をしたりいろいろなことを觀するのは、これは皆意密の行であります。それを行するのは信心相續の上に行じて行くのであります。大疏第三に或修ハ三昧ニ乃觀ニ女人之像ハ或忿怒等形ニ乃至行者於ニ此衆緣事相ニ皆以ニ諦信ヲ行レ之トあり。此の御釋分明であります。だから信心と意密とは同じであるといふ譯には參りません。一密行の人もあり、二密行の人もあり、三密具足の行者もあるべき筈で、一密行者なし

ハ、義を知
らずして
眞言を唱
ふるも功
徳ある事

とは言はれないのであります。

もう一つは意味を知らないで眞言を唱へて功德があるか無いかといふこととであります。これは屢々起る問題であります。大疏第七に「若し但だ口に眞言を誦じて、其の義を思惟せずんば、只だ世間の義利を成すべし、豈に金剛の體性を成ずることを得んや」と釋してあります。この意は眞言の義理を知らず、たゞありがたいといふ信心を以て眞言を唱へたのでは、世間の義利を成ずることは出来るが、金剛の體性を成ずることは出来ないといふのであります。世間の義利といふのは、除病延命、攘災招福、家内安全、子孫長久、怨敵退散、國家安穩、五穀豐饒、萬民快樂等の御利益であります。金剛の體性を成ずるといふは出世間の悉地で、成佛の御利益であります。依てこの釋の意は、眞言の義利を知らず觀ぜずして眞言を唱へたのでは世間の御利益は得られるけれども、成佛は出来ないといふことで

ニ、信心と
妄念

あります。今之を打ち返して考へて見れば、義理を知らずとも眞言を唱へたらば、成佛は出来ないけれども、世間の御利益は得られるといふ事であります。

次には信心と妄念との關係を申し上げます。信心をいたして居りましてその途中に於ていろいろのことを思ひます。即ち妄念が雜起するのであります。この妄念雜起は往生成佛の妨となるかならぬかといふことであります。吾々自身にもさういふことは屢々あり、世間の人からも屢々さういふ質問を受けるのであります。これは槇尾の自性上人の眞言念誦作法といふ書の中に委しく記してありますが、信心決定の後は設ひ妄念雜起しても、往生成佛の妨とはならぬと云ふ事であります。槇尾の自性上人は非常に尊い御方で、後宇多法皇の御歸依僧で、上人御病氣御危篤の時には、法皇親しく京都西山の槇尾山へ御臨幸遊ばされ、朝から晩まで上人の枕元にて御

看護遊ばされ、彌々御臨終の後御還幸遊ばされたと申すことであります。この上人の御説であります。譬へば汽車に乗る様なものであります。東京行の切符を買って東京行の汽車に乗ります。彌々汽車に乗り込んだならば汽車の中で九州へ行かうと思つたり、四國参りの事を考へて見たり、いろいろのことを考へたり思つたりしても、東京行の切符を買って汽車に乗込んで居る以上は、汽車はズン／＼東京の方に向つて進んで居る。いろいろの事を考へても、その考へることは東京行の妨げにはならん様なものであります。信心決定したならば、それより以後は設ひ妄念が雜起しても往生成佛の妨げにはならんものであると仰せられてあります。これは誠に結構な御釋と存じます。妄念が起らなければ結構であります。設ひ妄念が雜起しても、信心決定して、その信心が動かなかつたならば、往生成佛の妨げにはならんといふのであります。

次に臨終正念の事を申し上げます。人々は過去の宿業に依りまして、善い死に様をする人もあり、又悪い死に様をする人もある。あの人は平生誠に善い人であつたのに、死に際が悪うかつたのはどういふ譯であらうか、不思議でならぬと思つたり、あの人は平生甚だ悪い人であつたのに、死に際の善かつたのはどういふ譯であらうかと、奇異に思ふといふやうなことがあります。これは皆過去の宿業に依るので、設ひ平生がよくても臨終の悪い人もあり、又平生の悪い人でも善い往生をする者もあるのであります。宿業の然らしむる所で何とも致方はありません。昔から臨終の一念は百年の行に勝ると申しまして、臨終はよくなければならんというて、臨終の善悪を氣にする人が多い様であります。臨終に心がけるのは結構であります。が、臨終の善し悪しは過去の宿業に依るもので、何とも致し様がないのであるから、往生成佛は平生の行に依る、臨終正念の有無に依るものでない

と心得たらば宜からうと思ひます。ある時佛弟子が、佛にお尋ね申上げました。人あつて道を歩いて居る時、馬車の往來はげしく、左右に心をくばり、うろく／＼して居る内に、忽ち車輪にしかれて死ぬるといふやうなことがある。この人は死ぬる時、佛とも法とも念する暇がありませんが、かやうな人は死して後、如何なる處に往生致しますかと御尋申上げました。佛のお答へに、汝は木を切るのを見たことがあるか、屢々見て居ります。今こゝに一本の木があつて、南の方に傾いて居る、それを根元から切れば、この木は南に倒れるか北に倒れるかとお尋ねになりました。それは南に傾いた木であるから南に倒れるに相違ありません。北に倒れるといふやうなことはありませんと申上げた。佛の仰せに、汝のいふ通りである。すでに南に傾いて居るのであるから南に倒れるのは當然である。今汝の質問もその通りである。平生佛を信じて善根を積んで居るものであつたならば、そ

へ、有相の
三密と無
相の三密

れは地獄に往く道理はない。臨終の際佛とも法とも思はないでも、平生の行に依つて未來の生處は定まるものであると仰せられました。此事智度論に經説を引いて出してあります。之に依て往生淨土は平生の行に依る。必ずしも臨終正念の有無には依らんものであると心得てよいと思ひます。行につきまして有相の三密、無相の三密といふことを申上げます。有相の三密といふは、手に印を結び、口に眞言を唱へ、意三摩地に住するのであります。無相の三密といふのは舉手動足皆成密印、開口發聲悉是眞言、起心動念咸成妙觀と申して、吾々のすることなすこと皆佛の所作ならざるはなし、とするのであります。無相の三密は大日經密印品、大日經開題等にあり、有相の三密は諸儀軌及び即身義等に委しく説いてあります。惣じて我宗に機根の立て方は種々ありますが

「發心即到機 修行を用ひす

修行成佛機

無相三密機

舉手動足を密印と觀じ、開口發聲を眞言と思ひ、意の所念を妙三摩地と知る人なり

有相三密機

有相三密を行する人なり

大體この圖の通りにすれば、一切の機を網羅致します。この中發心即到の機と無相三密の機とは極大上根の人で、特別のものでありまして、通途多分は皆有相三密の機であります。故に今は有相三密の機のみに就て意得べき事を申し上げます。

有相三密の行者は依_テ有相_ニ契_フ無相_ニと大體意得たらよいと思ひます。有相の三密は因行、無相の三密は即ち證の境界と意得ます。有相の三密を行じて悟を開く、悟を開いた上で振返つて見れば一切諸法は自から曼荼羅境界と顯はれ、吾々凡夫のすること作すこと皆佛作佛業にあらざるはなしと顯はれるのであります。之を有相に依て無相に契ふと申します。このやうに説いて行けば、誰が説いても誤りが無いと存じます。

ある人は斯ういふことを申します。眞言宗では佛前で三密の行を修したりして居るが、そんなことは世間と懸け離れたことで世の中のためにはならぬ、それよりは世間に出て社會事業、公共事業、慈善事業などに盡力して、世の中のために働いて行くのがよい、これが當然なすべき仕事であり又眞言の本旨でないか、社會事業などをするのは即ち無相の三密行でないかといふ風に論するのであります。これは一寸聞けば面白い、善い説の様でも、實は大なる間違であります。無相の三密といふのは、善惡邪正の別を立てず、一切の三業の所作を悉く佛作佛業とするのであるから、殺盜姪妄等の十惡業も、五戒十善、仁義忠孝等の善事も皆平等々々であります。善惡邪正の別を立て、惡を捨て、善に就くのは皆有相三密の邊に屬するのであります。若し社會事業、慈善事業などを無相の三密行と云ふならば、殺盜姪妄等も亦無相の三密行ではありませんか、何が故に殺盜姪妄等を恣

まゝに行ぜよと勧めずして、殊更に社會事業、慈善事業などのみを勧めるのでせうか、甚だ道理の立たない説であります。殺盜姪妄等の惡業を捨てて社會事業、慈善事業の如き善事を取て勧めるのは、既に善惡に於て取捨する所が有るから、これは有相三密の邊に屬するもので、無相三密ではないのであります。論者の如きは無相平等の三密を以て世間の有相差別の行を論じようとするから、此の如くの誤を生じます。故に無相の三密は證の境界と意得るのが宜しいのであります。

證 果

これまでは因の句と根の句とに就て述べましたが、これからは方便究竟の句即ち證果に就て二三の要義を申し上げます。

イ、即身成佛

即身成佛には、吾々凡夫の身が、このまゝ佛ぢやといふ義と、吾々凡夫の身を捨てずして、このまゝ佛になれるといふ義と、兩様の義を含んで居

ります。大師の即身義に二經一論八ヶの證文を引いてありますが、これは皆佛になれるといふ義に屬します。又六大無碍等の頌文を作つて六大四曼三密の深義を釋せられてありますが、この御釋は多分このまゝ佛ぢやといふ義に屬します。故に異本即身義には理具の即身成佛、加持の即身成佛、顯得の即身成佛と三種に開いてその義を明かにしてあります。三種の中理具成佛は凡夫の身このまゝ佛ぢやといふ意で、本有の邊に約して立てたもので、これは所信の境であります。加持顯得の二つは凡夫がこのまゝ佛になれるといふ義の上に二種を開いたもので、二種共に修生の上に論ずるのであります。即身成佛を説くにはこの區別を意得て置く事が極めて必要であります。之を知らずして即身成佛を説く時は大なる誤を生じます。

皆さんも御承知でありませうが、明治時代に服部鍔海僧正といふ御方がありました。伊豫の仙龍寺の住職で、誠に溫厚な大徳でありました。この

人は明治時代に我宗の布教安心を定めた人で、我が宗布教上の大功勞者であります。昔は我が宗では説教などはせなんだものであります。どういふ理由か知りませんが、眞言宗は祕密の法門ぢやから、妄りに在家に説き聞かすべきものでないと思つたものか、或は寺々に澤山の祿が附いて居たから、説教して信徒を團結する必要はないと思つたものか、兎も角も説教は多くせなんだのであります。隨て布教上の安心などは更に定まつて居りませんでした。明治時代になつて各宗共に説教する様になり、我宗でも御説教師が段々出來ましたが、明治初年頃の説教といふものは安心なしの説教でありました。一席く口から出放題のことを言つて居りました。私も十二三歳の頃に度々御説教を聞いたことがあります。伊豫の石手寺の右衛門三郎の因縁や、石童丸が父親を尋ねて高野へ登る話や、一の谷の合戦に熊谷敦盛の組み伐ちの有様などを説いたもので、特に一の谷合戦の話の時

には敦盛が馬を海に乗入れて逃げる所を、後ろから熊谷が大音を擧げて、「敵に後を見せ給ふは卑怯なり、イザ引返して勝負あれ、オーイ〜」と呼懸ける時は、赤地に金の日の丸のついた扇子をバットひろげて遙かに敦盛を招く風を致します。マルデ芝居であります。ソレデ能化さんも當り前と思ひ、參詣人も歡んで居たので、今から思へば實にひどいものであります。その頃備後の鞆の福禪寺の寂明和上といふ説教者がありまして、明治廿五年に八十四歳で遷化せられました。此の人は十五六歳の頃から御説教を始めました。釋尊出世の本懐は一切衆生をして轉迷開悟せしむるに在り、故に釋尊一代五十年間は御説教ばかりして御座つた。自分も出家して佛弟子となつた以上は、生涯説教に勉めねばならんといふので、小僧の時から説教の稽古に勉め、十九歳の時京都六角堂で百日説教をやりました。その後八十四歳で遷化するに至るまで六十餘年間、三十餘ヶ國、一千餘ヶ

寺を巡つて、説教の席數約四萬席に達したといふ事であります。此人が東京兩國大徳院で百日説教をした時、百日の間毎日毎晩一席も闕かさず熱心に參詣するお婆さんがありました。百日説教の結願の日に、御説教の後に能化さんにお目にかゝりたいといふので、居間へ通した所が、このお婆さんのいふには、私は百日の間貴僧の御説教を承りましたが、眞言の御安心といふものが一寸もわかりません、貴僧のお説教は一席毎に御話しのお説教が變つて、一つこゝぞといふ定まつた所が無うて、御安心なしのお説教のやうに思ひますが如何でございますかと尋ねました。寂明和上、胸を突かれました。お婆さん、よく聞いてくれた、なる程お前さんのいふ通り、私は説教はして居るが安心といふものが實はないのぢやというて、正直に白状したといふ事であります。安心なしの御説教は寂明和上一人に限らずその頃の御説教師は皆同様でありました。服部僧正は斯ういふ類の話を段々

聞込まれました、宗旨に安心がないといふのは甚だつまらん事である。眞言の安心を是非とも定めなければならんといふので京都に來まして本願寺の總會所へ一年あまり毎日通うて眞宗の御説教を聞き、どういふ風に説けば善いかといふ事を研究して、その結果遂に出來上つたのが、安心教示章一卷であります。これが出來上るまでの服部僧正の御苦心は非常なもので安心教示章一卷は服部僧正の宗旨に對する赤誠と御苦心との結晶であります。又服部僧正は甚だ御謙遜の方でありまして、この教示章を宗内一般に流布せしむる爲には自分の名を出すべきでないといふ御考へで、別處榮嚴大和上の御作といふ事にして、眞言宗の法務所から出版して宗内一般に行ふ事になされましたが、我宗の布教上の安心は此に至つて始めて定まつたのであります。その安心の趣意は、上下二根を分けて、上根は三密雙修即身成佛、下根は一密口唱往生淨土と定め、布教は多く在家に對するもので

あるから、専ら光明眞言を唱へて浄土往生を顯はしめる方に重きを置いて説くのであります。

これは親しく服部僧正から承つた話であります。斯ういふ事があります。服部僧正の御友達に何某といふ方がありました。其人の名は服部僧正もわざと遠慮して置くと言はれましたので誰かわかりません。この人は服部僧正が教示章を作つて往生浄土を盛んに主張して居られる頃、眞言宗は即身成佛が肝心ぢや、浄土往生を説くなどは以ての外ぢやといふので、即身成佛一點張りで御説教をして居られたさうです。服部僧正久し振りでのの人に會はれた時に、貴僧は前から即身成佛を説いて居られたが、この頃もやはり即身成佛を説いて居られますかといふと、ア、あれはモウ、スツカリやめてしまつた、といふ答へです。どういふ譯かといふと、あれでエライ目に遇つたことがある、耻かしい事ぢやが、マア聞いて下さい。先

年關東のある所で、お説教して居つた所が、一番終りの日に一人の老人が來て、能化さんに面會したいといふので、會つた所が、この間から段々お説教を承りました處、即身成佛といふ事を御説きになつて、自分も佛ぢやと仰せられましたが、あなたは即身成佛して佛になつて御座るのですかと尋ねるから、勿論私は佛になつて居る。私ばかりでない、お前さんも即身成佛して居るのであるが、自分で自から知らずに居るのぢやと答へた。處が老人の言ふには、しかしあなたが實に佛になつて御座るならば、佛さまのやうに私の眼にも見えさうなものであります。今拜見した所ではどうも一向凡夫僧のやうに見えますのはどういふ譯でしょうか。といふから、それはお前さんに疑の心があるからぢや、疑の心を取去つてしまへば、すぐに分るのであると答へた。所が、そんならばその疑の心をどうぞ取去つて頂きたいといふ。それはいけない、自心の中の疑の心を取去るのは自分の

修行によらねばならん、自から修行するが宜しいといった所が、その老人一段と聲を張り上げて、これは以ての外の事を承る。昔し弘法大師清凉殿に於て宗論をなされた時には、諸宗の高僧皆弘法大師の即身成佛の義を疑はれた。その時に弘法大師は南面して結跏趺坐し印を結び眞言を唱へ、現身に佛の相を現じて即身成佛の實證をお顯はしになつたので、各宗の高僧達も地に平伏し、恐れ多くも上御一人も、御座をすべらせられて南無遍照金剛と唱へて禮し給うたといふことで、此の事はあなたのお説教にも先日承つたことである。その時は諸宗の高僧皆疑の心を持つてゐたから、弘法大師は即身成佛の實を示して、その疑を取り去られたのであります。あなたも實に佛になつてござるならば佛の相を見せて頂きたい、そして私の疑の心を晴らして下さいと突込まれた。これには全く閉口して、何とも返答が出来なかつた。斯ういう次第で、それ以來即身成佛はスツカリやめて

往生淨土を説く事にしたといふ事であります。これは私親しく服部僧正から承つた話ですから、決して作り話ではありません。

斯ういふ話を聞くと、即身成佛は説くことが出来ない様に聞えますが、決してさうでない。説き様が変わるかつたのであります。此の人は三種成佛の區別分齊を明かに會得して居らず、理具成佛のみで説いた處へ、老人は加持顯得の方から難を入れたのであります。この時理具は本有、加持顯得は修生といふ事を意得て居てそのつもりで説いたら、老人の難も起らず。設ひ難ぜられても容易に返答が出来て閉口せず済んだ筈であります。依て即身成佛を説くには三種成佛の區別をよく意得て置く事が必要であります。

即身成佛は現在五十年の内に佛になる事とのみ思ふ人もあるが、さうではありません。二生三生を経ても、凡夫有漏の身のまゝで成佛するから、

口、二生も
三生も即
身成佛な
る事

矢はり即身成佛といふのであります。

私は讚州三谷寺の弟子でありますが、三谷寺の本尊は十一面觀音様で、毎月十八日の晩には觀音供を勤め、參詣人も少しありますので、私の師匠で明純といふ老僧が存命の時イツモ御説教を致されました。私はまだ十二三歳の時ですが、ある日の御説教に、「佛法の中では光明眞言が一番有難いのぢやから、御前方はこれを始終唱へるがよい。始終唱へて信心して居れば、現世は安穩、死んで未來は即身成佛するのぢや」云々と申されました。その頃私の兄弟子が四五人もあつて、中には高野で三四年學問して来たものも二三人ありましたが、それ等が集まつて「ウチの老僧はアンナ間違つた御説教をする、即身成佛は現世で成佛する事ぢやのに、死んで未來は即身成佛など言つて、耻かしくて聞いて居られん」と評しあつて居りました。それから後ち兄弟弟子揃つて本堂の掃除などに行きました時には

大きな聲で「死んで未來は即身成佛」といふと皆の者がドット笑ひました私はまだ子供で何にも分りませんから、老僧が間違ひで、兄弟弟子等の言ふのが正しいのであらうと思つて居りました。

處が、それから十五六年も経て、私は高野山に上り宗義を習ふ内に、淨嚴和上の即身義冠註を讀みますと、その中に即身成佛に就て二句分別が出て居りました。即ち

一生成佛は必ず即身成佛なり(第一句)

即身成佛は必ずしも一生成佛にはあらず(第二句)

とありました。此に至て老僧の「死んで未來は即身成佛」といつたのは宗義上正しい説で、兄弟子等の笑つたのは、却て生學問の誤であつたといふ事を始めて知りました。

即身成佛には速疾頓成と不轉肉身との兩邊の義を含むのであります、一

ハ、速疾頓
成と不轉
肉身

生成佛といふは速疾頓成の義で、此の顯教の三劫成佛に對するものであります。一乘經劫といふ論則に於て調べます。又不轉肉身といふは吾々凡夫が父母所生の肉身のまゝで成佛するといふ義で、此は顯教の有漏を轉じて無漏を得るといふ義に對するものであります。即身成佛自宗不共といふ論則に於て調べます。

この兩邊の義ある事を意得て置かないと、即身成佛を説く時、義筋がもつれてはつきりせぬ事があります。

次に往生の事を申し上げます。眞言宗は即身成佛の宗旨であるから、往生淨土といふ義はあるまいといふ疑があります。故にこの事もよく意得て置かねばなりません。

往生淨土といふのは厭離穢土欣求淨土、でありまして、この世を穢土として之を厭ひ、死して後には清淨安樂の淨土に生じたいと願ふのが往生淨

ニ、往生

土の義であります。我宗は即身成佛で自心即佛と觀じ、この身このまゝ佛になるといふ建前であるから義が反對になります。依つて我宗には往生淨土の義はあるまいといふ疑が起るのであります。併し眞言宗の中にも矢はり往生淨土の義はあります。眞言の事相の中に於て、壇を築くには擇地造壇と申して清淨の土地を擇ぶことがあります。又法を行するに吉日良辰を擇ぶこともあります。本尊を安置するにも佛を行者より高い所に安置いたします。尤も顯教の様に高いことはありません。淨土門では佛を此方から見上げるやうに高く安置してありますが、眞言の本尊様は低い所にあります。行者が禮盤の上に坐りますと行者の額と本尊様の腰のあたりとが相向ふ位の所に安置するのであります。斯ういふ例は事相の中には澤山あります。

一座行法の時正念誦の觀念にも「本尊の誦じ給ふ眞言の字は尊の御口よ

り出で、我が頂より入つて心月輪の上に至て右に廻つて列り住す、我が誦する真言の字は我が口より出で、尊の臍輪より入て心月輪の上に至て右に廻つて列り住す」と觀じます。此も本尊を行者より高く尊きものとして觀するのであります。設ひ生佛一如、自身即佛と云うても、修生門の時は皆斯ういふ風にせねばならん事であります。

若し真言宗に往生淨土の義あるべからずと言はゞ、真言の事相の中に淨地を擇び吉日を擇ぶ等の事あるべからざる筈であります。又設ひ自心即佛の觀が肝心であるとしても、心外に佛を見、佛を行者より高い處に安置して自身よりも尊い御方と觀する等は、皆修生門に於ける有相方便といふものであります。然らば娑婆即淨土と觀する真言宗の中にも、娑婆の外に淨土ありと觀じて、娑婆を厭うて淨土を願ふといふ事も、有相の方便としてあるのであります。隨て理趣釋經、阿彌陀の儀軌等の中に往生淨土の義を

ホ、密嚴淨土

説いてあります。斯ういふ譯ですから、真言の中に往生の義を説いても、決して教理に背くといふ心配はありません。此の説は知道上人の好夢十因といふ書に出て居ります。

真言行者の求める所の淨土は密嚴淨土であります。密嚴淨土は大日如來の淨土で、周遍法界であるから、兜率淨土も、極樂世界も、皆その中にあります。

興教大師の密嚴淨土略觀の中に密嚴淨土の莊嚴を委しく釋してありますが、その中に「十方の淨土を前栽とし、諸佛の妙刹を後園とす」と仰せられてあります。故に我宗に於て往生淨土を説くものは密嚴淨土を願ふのが目的である、と定めて置いたらよろしいと存じます。中には西方を願ふ者兜率を願ふ者など、いろいろあつても差支へありません。さういふ者は密嚴淨土に行けないかといふと、西方極樂も兜率淨土も皆密嚴淨土の中の一

部分であるから差支へないのであります。それならば此等の人は密嚴淨土の一部分だけを得て全體を得ることは出来ないかといふにさうでない。兜率を願うた者も、極樂を願うた者も、正しく往生した時には、自身即大日の觀智が開けて、兜率即密嚴、極樂即密嚴となるのであります。

往生と成佛とは同か異かといへば、此に淺深の二義があります。一往淺略の義ならば、往生の後に修行して成佛するといひ、往生と成佛を各別と意得ます。再往深祕の時は往生即成佛として、往生も成佛も異語同義と意得ます。往生といふ言葉も淺略の時は往いて生れると訓み、深祕の時は往とは煩惱を超過する義、生とは功德の生起する義と意得ます。無明煩惱を超過して兩部曼荼羅の衆徳自心中に生起顯現するといふ意であるから、往生即成佛になります。最初行者の意では往いて生れると思つても、三密の功德に依て正しく往生した時には即成佛になるのであります。

へ、往生即成佛

已上因根究竟の三句に就いて申述べましたが、これより後は二三の餘義を申し上げます。

本 尊

本尊について一言申し上げます。淨土門では彌陀一佛と定めてありますが眞言宗では、曼荼羅の諸佛菩薩を皆本尊とするから、本尊はいろ／＼になつて居りまして、本尊の多種多様なるは我宗の特色であります。本尊を一定するといふやうなことは教義上出来ないであります。併し自分の持念佛を定めて置く事が必要であります。特に自分に縁故の深い佛様とか、自分の特にすきな佛様とかを擇んで、不斷に之に歸依するのであります。多人集まつて連經する時は、どの佛様でも拜むけれども、自分一人で拜む時には一佛を定めて特に拜むのであります。弘法大師は不動尊を平生の持念佛となされて居たと申します。興教大師も不動尊を持念佛となさつて居た

様に承つて居ります。その他古來の高僧大徳の方々皆それ〴〵の持念佛を定めて居られた様であります。宗の全體に通じて本尊一定は出來ないけれども、人々各々には一佛を擇んで本尊と定め置く事が必要であります。さうせねば信心が堅まらないのであります。

尤も自分は不動尊を持念佛と定めて居るから、餘の佛は拜まぬなど〴〵いふ偏執を起してはいけません。餘の佛様に對する時には曼荼羅の諸菩薩は内證一味で諸尊皆同大日なりと觀じて、偏執を起さない様に、心懸ける事が必要であります。

三 力

次に三力の事を申し上げます。三力は御承知の通り以我功德力、如來加持力、及以法界力であります。以我功德力といふは行者が三密を修行する功德の力であります。自力といふばかりではない、三密を修行する力である

から功德力といふのであります。如來加持力といふのは先きに成佛して居る所の如來が吾々行者を加持護念し給ふ所の力であります。法界力といふのは、これにはいろ〴〵の説がありますが、正義の意に依れば、法性融通の力、生佛無碍の力であります。佛も衆生も共に六大所成の體であるから佛と衆生と本來一如平等にして無碍涉入するのであります。之を法界力と申します。加持祈禱して種々の靈驗を得るも、吾々凡夫が三密修行して佛に成れるも、皆この三力によるのであります。故に大疏第二卷に、由_下自善根及與_ト如來_ト加持力_ト法界力_ト故_ト、所爲_ト妙業皆得_ト成就_トと釋し、同第十一卷にも以_ト我功德力_ト故_ト、以_ト如來_ト加持力_ト故_ト、以_ト法界平等力_ト故_ト、以_ト此_ト三緣合_ト故_ト、則能成_ト就_ト不思議業_ト也と釋してあります。瓦は如何に磨いても玉にならぬ如く、凡夫はドコマデモ凡夫で、元來佛の性を備へてゐなかつたならば、自分で如何に修行しても、佛様が吾々を佛にしてやらうと思つて如何に御

骨折り下されても、吾々凡夫はいつまでも佛になることは出来ない筈であります。處が吾々凡夫は本來六大體性で本有の佛性を備へ生佛一如の體であるから、三密修行の我が功德力と已成の佛の加持力が加はりますと、直に佛にも成れるのであります。喩へば鑽石は磨けば玉となるのと同じであります。故に三力備はらねば成佛も往生も出来ない所以であります。而るに三力の中法界力は法性融通の力、生佛無碍涉入の力であるから、何時も働いて居ります、如來加持力は如來の大悲度生の力であるから、これも亦何時も働いて居ります。唯一ツ闕けて居るのは我が功德力であります。依て吾々は修行が肝要であります。修行さへすれば何時でも三力は揃ふのであります。

善惡の標準

善惡の標準といふことは、世間の學問でもいろいろ議論があつて六ヶ敷

い事でありませうが、佛教では善惡の標準は十善にあるとして置けばよいかと存じます。十惡に對する十善戒でありまして、之を守るが善、之に背くものが惡であります。出家在家ともに常に之を守り、晝夜不斷に怠らず之を守り、少しも此の戒に背かない様に努めて行かなければならぬものであります。吾々が社會に出て働く時には、いろいろの名利心といふものが起ります。名譽が欲しいとか、金錢が欲しいといふ心が起ります。それがために身を亡ぼすやうなことが随分澤山あります。近來世間のエライ人達で監獄に行く者がよくありますのは、皆この十善の道に背くからであります。世の中に出ている／＼の仕事をする人は、十善戒だけは必らず背かないやうにしなければなりません。譬へば子供が井戸を覗かうとするのは危険であります。その時に井戸に落ちない様にするには、シツカリした繩を以て子供の體を縛つて、その繩を傍の大木にでも結び附けて置けば宜しい

さうすると繩の長さの所までは自由に行きますが、それから先きは行けな
いから、井戸に落ちる心配はありません。世の中に出て働く者はこの十善
戒を繩として自分の體を縛つて置き、設ひ一命を失つても、此の十善戒だ
けは決して背いてはならんと堅く決心して居れば、名利の誘惑といふ危険
な所に臨んでも、身を誤る心配はないのであります。近來佛教各宗一般に
戒法が衰へて、戒法を説くものは殆んど無く、誠に残念な事ではありますが
尠くとも十善戒だけは御互に是非守る様に致したいものと存じます。

十善戒は人の人たる道で、之に背けば人間の資格を失ふのでありますか
ら、先づ第一に守らねばならん戒法であります。若し之を守らない者は、
設ひ三密行を行じて、砂上の樓閣であります。人道を全うして行く所に
佛の加護もあり、三密の行も効驗があるのであります。故に十善戒は自か
ら守ると共に、人々にもよく勸めて頂きたいものであります。

いろいろの事を申し上げたいと思ひましたので、話が切れくになり纏り
が付きかねて相すみませんが、此度はこれで私のお話は終りと致します。

眞言宗安心要義 終

昭和十三年二月十七日印刷
昭和十三年二月廿一日發行

著者

長谷 寶 秀

發行者

松本 隆 寛

印刷所

六大新報社印刷部

發行所

京都市下京區猪熊八條上ル
六大新報社

振替 京都二九四五番
大阪七三八番

終

12-10-10